INTERVIEW：インタビュー

小説家　赤神 諒さん

弁護士であり、行政法・環境法学者であるというと、それだけで超多忙な生活が想像されます。それが本格派の時代小説を毎年何冊も出版し続けている人気小説家でもあるというのは、どういうことだろうと思いながら、インタビューに臨みました。

二刀流の経緯のお話に続き、次々とあふれだすように作品の構想をお話しいただき、明るい光の中にいるモーツァルトに触れたように感じ、納得しながらインタビューを終えました。

聞き手・構成：伊藤 敬史

法律家と小説家の二刀流

── まずは弁護士になられた経緯を教えていただけますか。

同居の祖父が英文学者だった関係で、幼少から演劇、特にシェイクスピアが好きで、大学は英文科に進学しました。でも、400年前に書かれた作品を極東の島国で一生やる意義に迷いを覚えて、現実社会にも目を向けようと考えました。

それで、法律の勉強をしたら面白くて、幸か不幸か司法試験に受かったので、弁護士になりました。

── 英文科に在籍しながら大学3年生で司法試験に合格というのはすごいですね。そこから環境法・行政法の研究者になられた経緯を教えていただけますか。

東京弁護士会の公害・環境特別委員会に入ったのですが、私の恩師の一人が委員長をされていて、その方の影響もあって環境問題をライフワークにしようと決めました。一緒にいくつか事件をやらせてもらったりして。

その中で勉強が足りないなと感じて、大学院に入り直しました。ただ、当時は、大学院の勉強がおろそかになるぐらい、事務所に泊まり込んだりしながら、一流の弁護士になりたいと思って、民事も刑事も行政事件もやりました。趣味の山歩きの間も事件のことばかり考えたりして。

その後、アメリカに留学して環境法を勉強したのですが、帰国したのがちょうど司法改革の時期で、友人から日弁連の行政訴訟改革担当の嘱託に誘われました。日本の環境訴訟の7割ぐらいは行政訴訟ですが、その制度の根本を変える改革になるので、やらねばと思い、司法改革調査室の嘱託として、行訴法改正に取り組みました。

その頃には実務と研究が半々ぐらいになりました。どっちも好きですが、行政事件は違法判断が中心になるので、常に法律論をやることになり、研究と親和性が高い面があるんです。研究もしている中で、博士課程にいた時に、ロースクールの実務家教員に誘われて、結局そのまま研究者になりました。

── なるほど。

あと、私は、弁護士の書面も相当こだわって書いていました。自分の準備書面を読み返して、「ええわ、この書面」と（笑）。結構いい文章を書いてきたはずなのに、よく考えると、「この名文、どこ行ってんねん」と（笑）。弁護士の書面は、依頼者と裁判官と相手方ぐらいしか読んでくれずに、消費されてしまう文章なんですよね。せっかく作った文章がもったいないし、悲しいなと思って。

研究者になれば、論文として文章が残るし、読者も増えますよね。数人しか読まない書面ではなく、数百人ぐらいは読んでくれるものを書きたいと。

── 文章へのこだわりから研究者にというのは面白いですね。小説家になられた経緯を教えていただけますか。

日弁連の嘱託として、第一次行訴法改正と行政不服審査法改正をやり、その後、第二次行訴法改正に

挫折したのが40歳ぐらいでした。第一次改革の際、あまりにも課題が大きすぎるので、まず一段目をやって、二段目は5年後に改正行訴法の施行状況を見た上で実行するはずでした。特に環境紛争には団体訴訟が有効ですし、ロビイングも含めてあれこれ手を尽くしましたが、「一文字も改正しない」というまさかの結論になって、燃え尽き症候群みたいになってしまいました。

人生でやり残したことはないかなと思いつつ、そんな時に、久しぶりにベストセラーになった小説を読んでみたら、これなら自分でも書けると思ってしまったんです。それで小説を書き始めました。

── 各仕事の割合は、どのぐらいですか。

法律と小説で半々です。プライベートの時間は小説にほぼ全部振っていますね。本当は山歩きも、お酒も、飲み会も大好きなんですけど、そんなことをしていたら小説は書けないので、ストイックになりました。

── 法律と小説は、どのように両立なさっているのですか。

沿線住民しかわからない譬えで恐縮ですが、「総武線、中央線方式」です（笑）。私の住む吉祥寺などは、中央線と総武線が並行して走っていて、よく止まるんですが、それでもどっちかが動いていて、だいたい先へ進めます。同じように、法律で行き詰まると小説を書き、小説で行き詰まると法律をやる、みたいなイメージで両立しながらやっています。

── 弁護士としてのご経験が小説に活きていることはありますか。

はい。弁護士は、説明や文章や論理のわかりやすさが大事ですよね。小説のわかりやすさもありますが、他にも例えば弁護士は、当事者の行動を裁判所向けに合理的に説明しますよね。実は人間って何となくやることも多いんですけど、それにそれなりの理由と証拠を付けて、合理性を説明しようとします。小説も、読んだときに、こんな行動を取るはずないよと思われたら、興ざめで終わりなんですよね。私の小説は作者都合とか、偶然とか、不合理な破綻がないようにしています。

あと、歴史ものでお白洲ものを書こうと思っていますし、いずれは現代の法廷ものも書きたいですね。

「大友サーガ」の魅力

── 赤神作品というと、デビュー作の『大友二階崩れ』に始まり、「大友サーガ」と言われる戦国時代の大友家の人々を題材とした作品群が特徴的ですが、どうして大友家の作品を描かれているのですか。

戦国ものは一定の読者がいますが、信長とか三英雄は大家が書いてるし、ちょっと食傷気味じゃないですか？ 誰も知らないような、しかしだからこそ先の展開が読めない面白い物語で、歴史のはざまに消えていった人たちを書いて、知ってもらいたいと思いました。九州の大友家には未開拓の魅力的な素材がごろごろ転がっています。

──「大友サーガ」には、個性的な人がたくさん出てきますけど、特に思い入れがある人物はいますか。

戸次（立花）道雪ですね。道雪は、下半身不随になっても、最後まで大友家のために戦場で戦い続けた苛烈な人です。小説では敵と戦うというよりは、人間が誰しも闘わなきゃいけない運命に立ち向かっていく姿を描いているつもりです。

戸次道雪、高橋紹運、立花宗茂という3人を軸に、大友家臣団の人間模様を書くのが、私の全体構想なんですよ。まだ3分の1も書けてないんですけど、ライフワークとして、20作ほど書きたいと考えています。

── 大友の関係で、まだ書いてない題材があるんですね。

大友戦国史は、『平家物語』のような栄枯盛衰の歴史なんですね。九州の半分以上を制覇して、大大名として君臨していたのに、最後は滅亡寸前まで没落して、一応生き延びるけど、結局滅亡するんです。裏切りや内戦もあって、小説家としては魅力的な人物がたくさんいます。

『はぐれ鴉』

── 大藪春彦賞受賞の『はぐれ鴉』は、あだ討ちや恋愛の要素もある時代ミステリーですね。

『はぐれ鴉』は、7月に大分放送55周年記念ドラマになって、その後全国放送され

『はぐれ鴉』赤神諒 著 集英社

ます。神尾楓珠さんの主演で、椎名桔平さんが「はぐれ鴉」役です。

この作品はタイトルから入りました。もともと江戸時代の復讐ものを書きたいなと構想している時に、母と叔父夫婦と四人で旅行へ行ったんです。旅先でお酒を呑みながら、大学教員だった叔父は風変わりな人なんですが曲がったことが嫌いで、あだ名が『はぐれ鴉』だったと聞いたんですよ。これ、タイトルにいいなと。

さらに、私の小説を読んだ当時の竹田市長からご連絡をいただいて銀座でご馳走になった後、「うちを舞台に書いて」と竹田市の資料がどさっと送られてきました。それが私の考えていた構想に見事に符合したんですね。現地の生き字引のご協力もあって、あっという間に書き上げた小説です。

── この作品は、江戸時代に禁圧されていたキリスト教が日本独自の発展を遂げて人々に信仰されているという描き方が面白かったです。

あれはフィクションですけど、鎖国のために、何が本当のキリスト教なのか誰も分からない中で、200年ぐらいかけて変容して、似ても似つかぬものになって残っていったというのが真相じゃないかなとも思うんです。宗教って、その人の人格そのものなので、否定されると、戦争まで起こりかねない。日本にも宗教を巡るトラブルはたくさんあったわけですが、神仏習合のような共存のあり方が、世界的なモデルになり得るような気もします。もちろん簡単ではないでしょうが。

『火山に馳す』

──『火山に馳す』は、江戸時代の浅間山大噴火で壊滅した村の復興の話ですね。火砕流に村が飲み込まれていくシーンは、東日本大震災の津波を思い出しながら読みました。

『火山に馳す 浅間大変秘抄』赤神諒 著 KADOKAWA

デビュー前に軽井沢へ家族旅行で行ったときに、鎌原村で家族を作り直したという実話が掲示板に貼ってあって、いい話だなと思っていたんですよ。

この小説を書く時は、東日本大震災の被災者の方に関する本を10冊くらい読んで、どういう心境で家族を失われて、どういうふうに立ち直っていかれた、あるいは立ち直れないでいるか、という現実を念頭に置いていました。最後の場面はみんなで花畑を作るんですけど、あれも被災者の実話に着想を得たものです。

── 生き残った人たちで家族を組みなおして再生していくというのが、すごい話だなと思いましたが、実際にあったことなんですね。

ええ。史実として、家族を作った歌も伝わっています。江戸時代だからできたのかもしれませんが、同じ村にずっと住んで、突然家族の多くを失って、同じ傷を持っているからこそ分かり合えることがあったのではないでしょうか。想定し得るトラブルや苦悩を考えながら、家族とは何か、血のつながらない人間たちが親子や家族になれるのかを描きました。

── この作品の根岸九郎左衛門は実に魅力的ですね。

根岸は実在の偉い人ですけど、あんまり聖者みたいに書きたくないなと思って、抜けたところも作って愛嬌を持たせました。現代にはめったにいない、無私の心を持った政治家の理想像として描きましたね。

『佐渡絢爛』

── 昨年、本屋が選ぶ時代小説大賞を受賞した『佐渡絢爛』は、佐渡金山を舞台に、佐渡の復興という経済小説的な部分もあり、恋愛の部分もあって、ミステリーとしても面白い作品でした。

『佐渡絢爛』赤神諒 著 徳間書店

コロナの緊急事態宣言下で、亡くなった親友の告別式をオンラインでやったのですが、その時に再会した知人が研究で佐渡に通っていて、佐渡市長を紹介してくれました。その市長が佐渡金山の南沢疎水道の事業を熱く語っていらして、亡き友に捧げる意味でも、そのモチーフで書こうかなと思ったんです。

もう1つ、大学院で同窓の女性弁護士がいて、彼女

のお父さんも弁護士だったのですが、病気で余命何年と言われた時に、長年の夢だった時代小説を3冊も書き上げて出版されて亡くなったんです。ご縁があってその方の蔵書を譲っていただいたのですが、その中に江戸時代の岡山の鉱山と贋金づくりの資料があったんです。もう佐渡しかないと決めて、書きました。

── バラバラに見えた点がつながっていくと、ある滅ぼされた藩のお家の再興のためにみんなが動いていたという展開が面白かったです。

あれは、四十七士の裏返しなんですよ。赤穂義士は滅ぼされたから復讐をするという話ですけど、この話は、再興に一応成功した上で、佐渡への感謝、主君へのお詫びと証拠隠滅のためにみんな死ぬという形で反転させました。

── この作品は、間瀬吉大夫という豪放磊落な人と、荻原重秀という峻烈な天才の対比も面白いですね。

キャラ立ちした登場人物がぶつかり合うと、面白くなるんですよね。荻原は、悪玉に見せておいて、最後にどんでん返しで善玉に逆転させる。吉大夫は、ちゃらんぽらんなんだけど、実はすごい奴にする。二人は、対立するけれども、互いに分かり合っているという友情を描きました。

重版になったので、続編の構想を考えています。

『碧血の碑』

── 最近出た『碧血の碑』は、幕末をテーマにした短編小説集ですね。沖田総司、橋本左内、和宮、ヴェルニーから見た小栗上野介と、皆さん敗者側の人で、読んでいくとつながる感じですね。

『碧血の碑』赤神諒 著　小学館

私は、福井市から、「一乗谷ディスカバリープロジェクト」のメンバーを委嘱されているのですが、同じメンバーの榎木孝明さんから、「自分は7つの声を使い分けられるから、短編を書いてくれれば朗読するよ」というお話がありました。それが実現して、福井市から「松平春嶽と橋本左内で書いてもらえないか」というオーダーがあったんですね。

短編集の企画としては、幕末もので、スポットライトの当たりにくい敗者の側で、しかも各話の舞台を1つの場所に固定して書くという制限を自分に課しました。実は文体もテイストも季節も4話ごとに変えてあります。

── 心を揺さぶられる短編集でした。すべての作品にカマキリが登場しますね。

そうですね。身分も違うし、女性もいるし、外国人もいるし、殺人鬼みたいなのもいて、いわば曼荼羅の世界を描いたんですけど、何か1本通るようなアイコンが欲しいと思って、それをカマキリにしたんですね。カマキリって、表記もいろいろありますし、生態も興味深くて、メスがオスを食べるという苛烈さがある。カマキリを通して、それぞれの主人公の人物像を描きました。

たぶん世界初の試みで、アートコンテストも実施しました。京都芸術センターさんと連携して、表紙裏に二次元コードでデジタル画集も付いているんですよ。

最後に

── 今後描きたいテーマを伺ってよろしいですか。

新たなジャンルとしてはアートものですね。アートが好きで、アートナビゲーター（美術検定1級）という資格もとっているんですよ。夏から青木繁を主人公にした新聞連載も決まっています。

ゆくゆくは法律、小説、芸術という3刀流を完成させたいと考えています。

あと、弁護士が主人公のミステリーも書きたいですね。もし小説好きの会員の方で、「これは?!」という面白い事件や人と出会われたら、取材協力でも、あるいはご一緒にコラボでも、ぜひご一報ください！

プロフィール　あかがみ・りょう（本名　越智 敏裕）
1972年京都府生まれ。同志社大学文学部卒業。東京大学大学院法学政治学研究科修士課程修了。カリフォルニア大学バークレー校ロースクール留学後、上智大学大学院法学研究科博士後期課程（環境法専攻）単位取得退学。上智大学大学院法学研究科教授（環境法、行政法）。弁護士（48期・当会）、法学博士。2017年『義と愛と』（のちに『大友二階崩れ』と改題）で日経小説大賞を受賞し、小説家デビュー。2023年『はぐれ鴉』で大藪春彦賞受賞。2024年『佐渡絢爛』で本屋が選ぶ時代小説大賞受賞。